

本格始動! Project プロジェクト

データ駆動による 課題解決型 人文学の創成

データ基盤を構築・活用して
次世代型人文学研究を
開拓する



国文研 が描く 未来図

こくぶんけん

未来図 10年後の



Contents

国文研が描く
10年後の未来図

Lesson.01

「データ駆動による課題解決型人文学の創成」が
目指す未来とは?

Lesson.02

みらいを創る

- ①画像 ②テキスト ③国書データベース
④異分野融合研究 ⑤国際展開⑥社会貢献と人材育成

Lesson.03

これまでの振り返る

- ①前身プロジェクト「歴史的典籍NW事業」は
何を達成してきたか
②年表

COLUMN

文部科学省の大規模学術フロンティア促進事業とは

Lesson.04

これからの体制

国文研が描く 10年後の未来図



国文学研究資料館館長
渡部泰明

● 古典は「共感」を生み出す

私たちが今直面しているのは、分断と疎隔に絶えず脅かされ、浸食されている社会です。この時代に人文学が果たすべき役割とは何か。もちろん答えは一つではありませんが、少なくとも研究者には、「共感」の構造・機能を解明し、それが形成されるための基盤づくりに寄与することが求められています。

ここでいう「共感」とは、たんなる同情や思いやり（シンパシー）にとどまるものではなく、立場・状況の違う相手の身になる能力（エンパシー）を指します。情においても理においても他者を理解できる能力であり、その身になれる能力です。その人の身になる。それこそ日本文化の根底にあるものです。現代の最重要の課題である、多様な存在の共生を可能にするものです。それゆえ、「共感」を生み出すために、古典ほどふさわしいものはありません。「共感」によって生まれ、「共感」に支えられて継承されてきた共通の文化遺産だからです。

● 関心を持つ人すべてに古典を開く

といっても、古典があまねく人々に浸透しているかといえば、いろいろ留保をつけざるをえません。教育という点では、現在初等・中等教育から取り上げられ、事実上ほぼ義務教育となった高等学校でも、皆が十分古典になじみ、興味を深めているとは言い難い状況です。

思うに、高等学校の教育でいえば、現代語訳を重視しすぎているのではないのでしょうか。古典の現代語訳はかなり高度な技術を要する作業であり、これの学習を優先することによって、内容の魅力・興味深さを理解するまでに至りがたくなっています。訳は、基本的にどんどん示してしまっかまわないのです。訳を参照しながら、自ら面白さを発見するよう促す。それが「共感」力を育てるカギとなるでしょう。

その点、これから進める10年プロジェクトは古典教育の改善もしくは変革にも寄与していきます。正しく、わかりやすく、最新の成果に基づく本文を提供することに始まり、現代語訳も合わせて検索・調査することができるようになれば、古典を全く知らない人間でも、アプローチすることが可能になるでしょう。中等教育に限ったことではなく、関心を持つ人すべてに古典を開き、古典に「発見」的体験をもたらすのです。言語文化の継承を果たすことにつながるはずです。

● 現代の課題から古典の知を発見できるようになる

このプロジェクトにより、古典に対する私たち現代人の向き合い方は一変するでしょう。社会生活のさまざまな局面から、逆に古典を想起することを可能にするからです。現代的な諸課題を起点に、古典本文へと遡行し、古典の知を発見することができるようになります。発見こそ、あらゆる知の発動条件です。私たちは、この長い言語文化の歴史に、主体的に参画することができるようになるのです。

国文研が描く10年後の未来図として、夢を語ってみました。共感していただけるなら幸いです。

「データ駆動による課題解決型 人文学の創成」が目指す未来とは？

データ基盤を構築・活用して次世代型人文学研究を開拓する

デ

ータ駆動型の研究は、大規模データを収集し、そのデータに基づき解析するアプローチをとります。

本プロジェクトでは、人文学分野で生み出される大規模データを、多くの研究分野の利用に耐えるデータとして整備することで、人文学分野のデータの駆動性を向上させます。これを基盤として、新たな研究手法の構築とその環境整備を行い、人文学の分野における新たな研究のスタイルを開拓します。

例えば、環境問題のような複雑に問題が絡み合った課題には、多くの分野の研究者が参画し結束して対処することが求められます。人文学分野が生み出す大規模データを自然科学や社会科学の領域にも活用できるように整備することで、人文学分野の研究も、現代社会の課題へ積極的に参画することができるようになるのです。

次のページから「みらいを創る」として、①画像 ②テキスト ③国書データベース ④異分野融合研究 ⑤国際展開 ⑥社会貢献と人材育成、について説明します!

大型学術計画「データ駆動による課題解決型人文学の創成」は、文部科学省の推進する大規模学術フロンティア促進事業として 2014 年度より国文学研究資料館が推進してきた「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（2014 年度～ 2023 年度）の後継プロジェクトとして計画され、「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップの策定ーロードマップ 2020ー」（文部科学省、令和 2 年 9 月 24 日、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1388523_00001.htm）に掲載された 15 の計画の一つとして策定されたのち、2024 年 4 月事業開始になりました。（☞ Lesson.03 ②年表）

みらいを創る

①画像

さらに15万点を追加する



江戸近郊を襲ったマグニチュード 6.9 の直下型地震の災害の様子が絵と文字で記録される『安政見聞誌』

● 無料で利用可能なオープンデータ

国文研では「歴史的典籍NW事業」(☞ Lesson.03 ①)を通して、30万点の日本語の歴史的典籍の全冊画像を作成し、「国書データベース」(☞ Lesson.02 ③)において、web上で誰でも、いつでも、無料で利用可能なオープンデータとして提供しています。データベースは書名や著者名等で典籍を検索でき、全冊の画像を見ることができます。画像は高精細で作成しており、自由に拡大して細部まで確認でき、一部の画像はダウンロード可能です。

● 永続的なアクセスとユニバーサルに通用する権利表記

公開されている画像には DOI (デジタルオブジェクト識別子①) を付与しており、永続的なアクセスを保証するとともに、研究データとして活用しやすいようにしています。また、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス (CC ライセンス②) や、Rights Statements (③) といったユニバーサルに通用する権利表記を採用し、著作者や原資料の所蔵者の権利に配慮しつつ利用者の利便性を高めるため、よりオープンな形での公開を推進しています。

● アクセスに生じる様々なバリアを取り払う

本プロジェクトにおいては、さらに15万点の全冊画像を作成して合計45万点の画像の集積を行います。年代的には範囲を明治時代初頭にまで拡張し、書籍館(明治5年[1872]設立)を源流とし国立国会図書館へと受け継がれてきた書物群への連続性を確保することで、現在、国立国会図書館から発信されている国立国会図書館デジタルコレクションとの隙間を埋めていきます。また、個人や寺社、海外の図書館などに所蔵され、アクセスの難しかった典籍についても連携を模索し、古典籍へのアクセスに生じる様々なバリアを取り払い、前近代までに蓄積された日本人の知の具現である典籍データを利活用できるようにしていきます。

① Digital Object Identifier。詳細は <https://doi.org/> 参照。

② CCライセンスを提供している国際的非営利組織とそのプロジェクトの総称。詳細は <https://creativecommons.jp/licenses/> 参照。

③ <https://rightsstatements.org/en/> 参照。

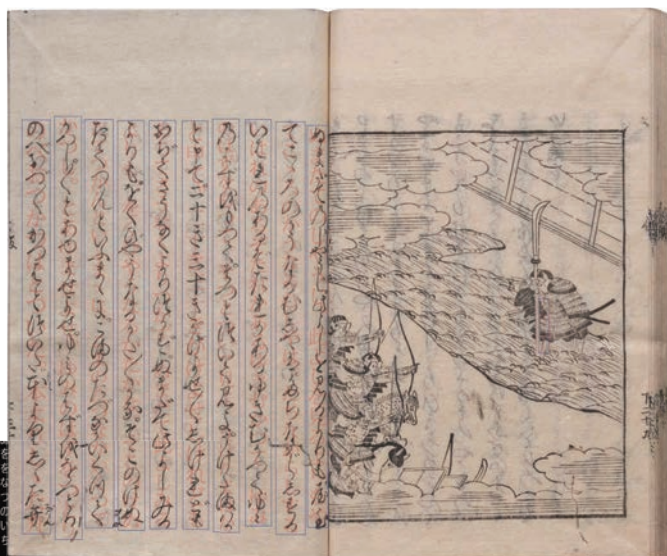
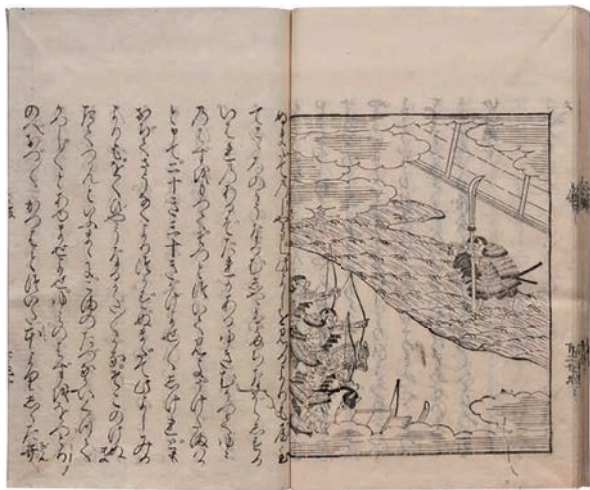


② テキスト

機械可読型にデータを整備する



AI を用いた認識技術



```
##### END PAGE INFERENCE PROCESS #####
##### START PAGE INFERENCE PROCESS #####
### Layout Extraction Process ###
### Line OCR Process ###
##### END PAGE INFERENCE PROCESS #####
##### START PAGE INFERENCE PROCESS #####
##### PROCESSING TIME #####
Average processing time : 1.3308754971152859 sec / image file
done: 0099-063510
20240118-091100: 0099-063605
25 files copied
start inference !
input_root : /mnt/storage/tmp/kotenocr2_20231222_0/0099-063605
output_root : /mnt/storage/kotenocr2/0099/0099-063605
config_file : config.yml
add_info : False
### Line OCR Process ###
##### END PAGE INFERENCE PROCESS #####
##### START PAGE INFERENCE PROCESS #####
##### Layout Extraction Process #####
##### Line OCR Process ###
```

OCR処理のプログラム

```
14013 <lb/>けりおくかたのくひやうこのよしを
14014 <lb/>りもめらおそしや文へんけいの人を
14015 <lb/>するはかりことよかみりてはかな
14016 <lb/>やいよといふまうにさしとりきさ
14017 <lb/>にこそいたりけれおさしにあたるそ
14018 <lb/>はねてまきいたてをつくふせし
14019 <lb/>よりししたるへんけいにてそのみを
14020 <lb/>いたします
14021 <pb n="834" source="0099-0211-00834">
14022 <lb/>ぬまででのしやうじ。此よしを見るよりも、や至
14023 <lb/>てころのかつなるむしやは、たらながらしする
14024 <lb/>いれのあるぞなれかあるゆきむかつてゆき
14025 <lb/>のはずをもつて、そつとついで見よ、うけたまはる
14026 <lb/>と申て、二十き三十き、かけよせ、しけれども
14027 <lb/>おぢてさうなくよりつかず、ぬまで此よみ
14028 <lb/>よりも、をくびやうなるかた、かな、そのけぬま
14029 <lb/>たてつかんといふまうに、こまのたづなかくつて
14030 <lb/>かつし、／＼とあゆませよせ、ゆきのはずをつり
14031 <lb/>のべおづ、／＼かつはつた。本よりししたる
14032 <pb n="835" source="0099-0211-00835">
14033 <lb/>けいで、かれ水たをすごとくに、かつはとま
14034 <lb/>ろひり、まろひるそのせんに、もつたるなき
14035 <lb/>なたがひりとするを見るよりもぬまで
14036 <lb/>のしやうじは、ししたるものしらずして、また
14037 <lb/>きつてかるところへ、さちたましめぬに
14038 <lb/>そはず、こまよりしにころびおち、うきぬ
14039 <lb/>しづみぬがれて、ころもかわのぬせきに
14040 <lb/>せかれてしんだししを、きせん上下をしなへ
```

TEI による構造化

● 研究基盤となるデータインフラストラクチャーとして

「国書データベース」で公開している 30 万点を超える古典籍の画像はそのままでも貴重な研究資源ですが、機械可読な形でテキストとしてデジタル化することにより、オンラインでの検索・表示システムや機械学習モデルの作成などに利用できるようになります。

前者は古典籍を直接ひもところとする人々、後者は間接的により広範な人々に活用されることが見込まれるでしょう。これまで課題であった「くずし字」も、近年人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) の「AI くずし字 OCR サービス」^①あるいは国立国会図書館が開発・公開を進めている「NDL 古典籍 OCR」^②によってかなりの精度でデジタル化することが可能になりました。

本プロジェクトではこれらの OCR 技術で作成するテキストをベースに、TEI (Text Encoding Initiative) という国際的なガイドラインに基づいて、最小限のマークアップを施した構造化テキストの作成などを進めます。また一部テキストに関しては研究者による校正や既存の翻刻資料をもとに、より信頼度の高いテキストを提供します。

さらに、TEI ガイドラインを策定しているコンソーシアムにも協力しつつ、国際的に通用する、より適切な古典籍のデジタル化の方法を模索していきます。文献の種別や時代に応じて、精緻な分析に供するためのマークアップの方法には差異があるため、個別の研究を通じて整備していく必要があります。これら大きく二段構えの計画によりつつ、様々な機関および研究者の協力のもと、研究基盤となるデータインフラストラクチャーとして整備していきます。

① <http://codh.rois.ac.jp/kuzushiji-ocr/> 参照。
② https://lab.ndl.go.jp/data_set/r4_koten/ 参照。

みらいを創る

③ 国書データベース

さらなるデータの充実と連携の強化

● 進化し続ける世界最大級の日本古典籍データベース

「国書データベース」(https://kokusho.nijl.ac.jp)は、2024年現在、国内外の機関や個人が所蔵する書誌約90万点、デジタル画像約30万点を公開する、世界最大級の日本古典籍データベースです。本事業で作成するデジタル画像や全文テキストの成果は、「国書データベース」を通じて広く一般に公開して行きます。

海外機関で所蔵される古典籍の目録「コーニツキー版 欧州所在日本古書総合目録」や、主に明治期以降近代を対象とした「近代書誌・近代画像データベース」など、従来公開されてきた関係するデータベースの統合を行い、データの充実を図っています。本プロジェクト期間中には、これまでに国文研が構築した「日本古典資料調査記録データベース」「古典選集本文データベース」「古筆切所収情報データベース」のデータ追加や統合、「国文学・アーカイブズ学論文データベース」との連携による、古典籍をもとに執筆された論文情報とのリンクの実現を目指します。

● 典拠情報の利用の広がり

「国書データベース」の典拠情報(著作、著者)は、国立国会図書館サーチ(①)の「タイトル標目」「著者標目」として利用されており、識別子として米国議会図書館の Standard Identifier Source Codes(②)に登録されています。また、国立情報学研究所が運用する目録所在情報サービス(NACSIS-CAT③)の「統一書名典拠」としても利用することができます。

Web NDL Authorities
国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス

検索結果に戻る

伊勢物語

ID	00629985
典拠種別	著作
skos:inScheme	
名称/タイトル	伊勢物語
xi:prefLabel	
名称/タイトルのカナ読み	イセ モノガタリ
ndi:transcription@ja-Kana	
名称/タイトルのローマ字読み	Ise monogatari
ndi:transcription@ja-Latin	
別名/別タイトル	マデイセモノガタリ; 真名伊勢物語; 伊勢物語; 旧本伊勢物語; イセモノガタリ; マデイセモノガタリ
xt:altLabel	
分類記号	913.32 (NDC10); 913.32 (NDC9); KG52 (NDLC)
skos:relatedMatch	
関連リンク	n00029821 (LCNAME); NDL00629985 (VIAF)
skos:conceptMatch	
出典	KOKUSHO: 157 伊勢物語 (請求記号: 913.32-I241i)
dc:source	
作成日	1998-01-30
dc:created	
最終更新日	2024-01-09T11:10:32
dc:modified	
外部サイトへのリンク	Wikipediaで検索を行う ※Wikipediaの機能により、違うキーワードが表示される場合もあります。

CiNii 論文・データをさがす 大学図書館の本をさがす 日本の博士論文をさがす

輸入伊勢物語 2巻

書誌事項

輸入伊勢物語 2巻
[出版者不明], 寛文2 [1662]

タイトル別名	伊勢物語
タイトル読み	エイリイセモノガタリ
統一タイトル	伊勢物語(KOTEN:157)

電子リソースにアクセスする 全1件

輸入伊勢物語 国文学研究資料館

大学図書館所蔵 1件 / 全1件

すべての地域 すべての図書館 OPACリンクあり

京都大学 附属図書館 回
4-30|イ|4 30162 OPAC

NDL Web AuthoritiesとCiNii Researchで典拠情報が使われている。

Bibliography	
BID	200016474
Bibliographic Source	NiIL's Books
Print/Manuscript	
Writing	寫本 (英)
Matters	西三條/首尾 (桐書)
Frames	15. 7×15. 2 cm, 枳
Frames	16冊
zanketu	桐書・夕陽・紅葉製・英・割木・蓮生・扇屋・結合・若葉下・柏木・横笛・匂兵部卿・東屋・浮舟・手紙・夢浮橋序
Bibliographic Note	(形) 列帖紙。
Collection	国文学研究資料館, 貴重書
Old	99-165-1~16

Work	
Work ID	2357
Uniform Title	源氏物語 (げんじものがたり) (Genjimonogatari)
Title	
volume	五四冊
Other Titles	[1] 源語 (げんご) (Gengo) [2] 光源氏物語 (ひかるげんじものがたり) (Hikarugenjimonogatari)
Author	紫式部 (MurasakiShikibu)
keyword	物語
note	(備) 日本古典文学大辞典に解説あり。(欧) 欧州所在日本古書協会目録にもデータあり。
whereabouts	【写】 国会 (巻四二次, 五四冊) (伝上田秋成写一冊) (挿絵, 古写)



国書データベースが含むメタデータ。書誌・典拠(著作・著者)・画像タグ・全文テキストと、これらのデータは他機関とのデータ連携に使われる。

● 他機関とのデータ連携

「国書データベース」のデータは、原本所蔵機関のデジタルアーカイブ、国立国会図書館サーチ、CiNii Research、ジャパンナレッジなどでも利用されています。

● メタデータ標準化の取り組み

ジャパンサーチや海外のデジタルアーカイブなど、さらなるデータ連携を推進するため、古典籍のメタデータ標準化に取り組んでいます。「メタデータ流通ガイドライン(古典籍編)」(④)は、国立国会図書館と当館が協力し、オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR)(⑤)、「これからの学術情報システム構築検討委員会」とも連携して策定しました。これにより、国立国会図書館、国内の機関リポジトリや大学図書館、海外の学術機関とのデータ連携が容易になります。

● APIによるデータ利活用

書誌情報やデジタル画像など、公開するデータの自由な利活用のため、API(Application Programming Interface、データを機械的に取得する仕組み)を整備・充実させます。利用登録(予定)後に、各データの利用条件に沿ってご利用いただけます。

- ① <https://ndlsearch.ndl.go.jp/> 参照。
- ② <https://www.loc.gov/standards/sourcelist/standard-identifier.html> 参照。
- ③ <https://contents.nii.ac.jp/catill> 参照。
- ④ <https://ndlsearch.ndl.go.jp/guideline/historical> 参照。
- ⑤ <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>



ジャパンナレッジとの連携
<https://japanknowledge.com/>

みらいを創る

④ 異分野融合研究

基盤技術の深化・高度化をはかる

人文学の範囲を超える異分野との様々な共同研究を行い、基盤技術の高度化とデータ駆動研究を推進していきます。近年では以下の研究を行っています。

● AIによるテキストデータ作成

国立情報学研究所等と連携し、AIによる文字認識技術を用いたテキストデータ作成に関する共同研究を実施しています。くずし字認識技術の高度化を図るなど、テキストデータ作成のための技術開発・高度化を推進します。



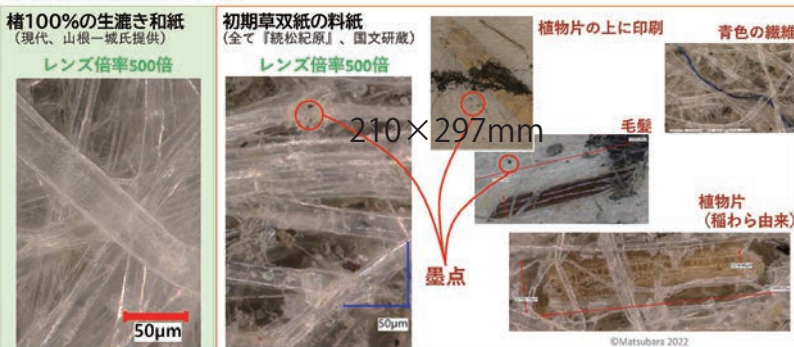
ROIS-DS CODH開発
AIくずし字認識アプリ「みを(miwo)」
<http://codh.rois.ac.jp/miwo/>

● 歴史的典籍のマテリアル分析

実践女子大学文芸資料研究所等と連携し、マテリアル分析の手法確立とメタデータ作成に関する基礎研究を実施。デジタルマイクロスコブ等を用いた料紙分析による草双紙研究の進展を図るなど、マテリアルとしての書物から次世代型の研究を目指す共同研究を推進しています。

高精細デジタルマイクロスコブによる草双紙料紙観察の方法

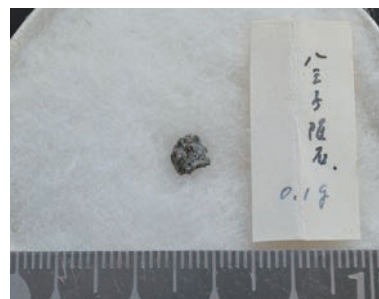
レンズ倍率20倍から1000倍程度まで上げながら、紙表面の様子から繊維の状態や夾雑物等を観察していく。



松原哲子
(古典籍データ駆動研究センター)
日本近世文学会(2022年6月12日)
発表資料

● 古典籍から展開する

茨城大学地球・地域環境共創機構や国立極地研究所等と連携し、歴史的典籍に蓄積された災害関係のデータを活用した典籍防災学の手法の確立を目指す共同研究を実施しています。



■ 八王子隕石画像

⑤ 国際展開

事業と研究を海外に広める

データ駆動研究に関する国際的なイベントの開催や参加など、事業及び研究の国際的な展開を積極的に推進しています。

● 国際学会などの取組

国際学会などの主催・協力を積極的に行っていきます。2023年9月には、デジタルヒューマニティーズの国際学会である JADH (Japanese Association for Digital Humanities) のホストとして、年次国際大会 JADH2023 をオンライン開催しました。今後も次世代型人文学研究の発信に貢献していきます。

● 研究成果の国際発信

共同研究の研究成果を、さまざまな形で国際的に発信していきます。例えば、マテリアル分析という新手法の発展に取り組み、国際シンポジウム「草双紙研究の未来 文理融合研究の成果 第二回」を実践女子大学文芸資料研究所と共催（後援レーザーテック株式会社）して、その最新動向を紹介しました。

● 国際イベントで発信

本プロジェクトや国書データベースの取り組みについて、さまざまな国際イベントで発信していきます。例えば、日本に関するあらゆる研究者の交流を行うヨーロッパの学会 EAJS (European Association for Japanese Studies ヨーロッパ日本研究協会) や、日本資料に関心を持つヨーロッパの専門家による団体 EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists 日本資料専門家欧州協会)、アジアを専門分野とするアメリカの学会 AAS (Association for Asian Studies アジア学会) の年次大会に継続的に参加し、最新動向を発信していきます。



EAJS2023年次大会(2023年8月17~20日)



EAJRS2023年次大会(2023年9月13~16日)



JADH2023(2023年9月20日~22日)



草双紙研究の未来(2023年12月17日)

みらいを創る

⑥ 社会貢献と人材育成

最新動向を広く社会に展開する

プロジェクトの最新動向は、ウェブサイトやイベント等により、社会へ広く公開しています。また、本プロジェクトの取り組みに関連し、関係者及び市民へ向けた啓発・教育イベントも以下のように開催しています。

● 機構内のコラボレーション

本プロジェクトでは、人間文化研究機構を構成する機関間での連携協力も推し進めていきます。広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」では、古い時代の書物群を、国立歴史民俗博物館、国立国語研究所とともに研究しています。



異分野融合による総合書物学の拡張的研究
<https://www.nijl.ac.jp/~ibunya/>

● 啓発・教育イベント

研究者や図書館関係者、市民等へ向けたさまざまな啓発・教育イベントを企画していきます。



「人文学のためのデータ構造化セミナー」

学術研究のDX化への対応と新たな研究手法を習得した人材の育成を目指し、人文学データの構造化に関する講義と実習を交えたセミナーを、人文学の大学院生や若手研究者等を対象に開催しました。



連続講演会「TEI x Libraryが拓くデジタル人文学と図書館の未来」

国内の人材育成を視野に入れつつ、図書館関係者、研究者等との意見交換を行いました。

● 求む！若手研究者

本プロジェクトでは、活動にご協力いただける若手研究者を求めています。公募情報やイベント開催情報は当館ウェブサイトから随時公開いたしますので、是非積極的にご参加ください。

■ 最近の若手研究者採用実績

平成31/令和元（2019）年度	特任准教授1名
令和3（2021）年度	プロジェクト研究員1名、機関研究員2名
令和4（2022）年度	特任准教授1名、特任助教1名

若手研究者の退職後就職先の例：北海学園大学、慶應義塾大学、埼玉大学、國學院大學、白百合女子大学、愛知県立大学、国文学研究資料館 等

これまでを振り返る

①前身プロジェクト 「歴史的典籍NW事業」は 何を達成してきたか

2013年4月から2024年3月まで、国文研が中心となって実施してきた歴史的典籍NW事業（正式名称：日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画）を継承しているのが本プロジェクトです。継承するにしても、NW事業ではなにが培われてきたのでしょうか。その一端をご紹介しますとおきたいと思います。

● データベースの充実

まずあげておきたいのは「国書データベース」における量的達成です。NW事業中に、約30万点の古典籍について全冊画像を撮影・公開しました。30万点といってもなかなかイメージできませんが、たとえば「南総里見八犬伝」全106冊でも1点ですから、その規模感がわかるでしょう。画像枚数に換算すると約3200万枚となります。この古典籍画像を「いつでも・どこでも・だれでも」自由に、無料で利用できるのが「国書データベース」です。ここでは、研究者にとどまらず、多くの人につかってもらうことを目指して、三つの方策を掲げています。

①ユーザ自身がビューワを選択できる国際標準 IIIIF（トリプルアイエフ）を採用

画像データの相互運用性を高める国際標準である IIIIF に対応したことで、ユーザは IIIIF 対応ビューワを自由に選択できるようになりました。

②コンテンツのリンク切れを防ぐ請求番号 DOI®（デジタル識別子）の採用

公開機関の都合（サーバーの入れ替え等）で URL が突如変更されることがありますね。そうした場合にも、DOI に登録することで、リンク切れを防ぐのです。



唯一の日本古典籍ポータルサイト
<https://kokusho.nijl.ac.jp/>



IIIIF (International Image Interoperability Framework)
<https://iif.io/>



DOI (Digital Object Identifier)
<https://www.doi.org/>

③公開画像の利用条件の明確化

公開されている画像を利用したい場合、どう手続きをしたらよいか戸惑うことも多いかと。いちいち所蔵機関に問い合わせなくてもデータベースで明示している利用条件をみていただければと思います。

こうした試みをもとにして、一層の充実を本プロジェクトでは果たしてまいります。

● 画像作成機関の充実

歴史的典籍 NW 事業の 10 年間で 188 機関（個人蔵含む）の協力を得て、画像作成してきました。従来、なかなか画像化ができなかった機関もありますし、海外の機関も含まれています。こうした機関との間に覚書等を交わしながら、作成した画像の一層の活用を目指していきます。

● オープンデータの充実

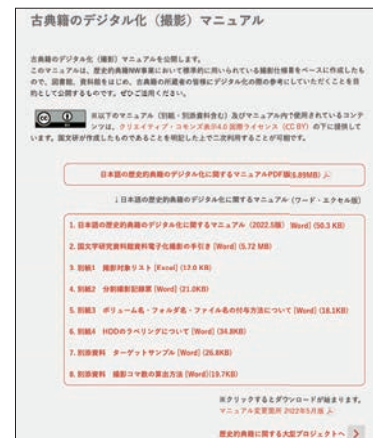
画像公開にあたって、出来るだけオープンな形での利活用を引き続き推進していきます。NW事業ではそのほかに、くずし字認識に必要な字形データ 100 万文字を CODH の協力のもとオープンにし、くずし字認識技術の推進に一役をいたしました。また撮影マニュアルのオープン化により、古典籍の撮影におけるノウハウの開放も果たしています。

● 異分野融合研究の充実

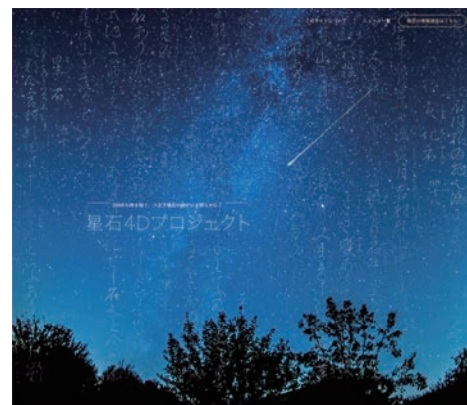
古典籍はなにも日本文学関係の書冊しかないわけではありません。宇宙に生命の神秘を解明できるカギが残されているように、古典籍には先人達書き留めた記憶・記録が残されているのです。古典籍を読み解く研究者と、その内容を活用したい他分野の研究者とがともに手を携えることで、現代社会に資する共同研究が可能となります。NW事業では典籍防災学（オーロラ研究）やくずし字認識研究をはじめ、さまざまな共同研究グループが誕生しました。引き続き異分野融合研究を推進していきます。



日本古典籍くずし字データセット (CODH)
<http://codh.rois.ac.jp/char-shape/>



古典籍のデジタル化（撮影）マニュアル
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/database/index.html>



1817年12月29日(旧暦では文化14年11月22日)に現在の東京都八王子市中心部に落下した隕石を古文書とともに解析していく「星石4Dプロジェクト」
<https://polaris.nipr.ac.jp/~hi4d/>

これまでを振り返る

②年表 [大規模学術フロンティア促進事業への採択経緯]

平成 31 / 令和元 (2019) 年

2月

日本学術会議が「第 24 期学術の大型研究計画に関するマスタープラン (マスタープラン 2020)」の公募を開始

3月

国文学研究資料館から「データ駆動による課題解決型人文学の創成」を応募

8月

「マスタープラン 2020」について、日本学術会議による「データ駆動による課題解決型人文学の創成」に対するヒアリング

令和 2 (2020) 年

1月

日本学術会議が「マスタープラン 2020」を公表し、「データ駆動による課題解決型人文学の創成」が重点大型研究計画として選定

2月

文部科学省が「マスタープラン 2020」を踏まえて「ロードマップ 2020」の策定を開始し、国文学研究資料館から書面審査書類を提出

8月

「ロードマップ 2020」について、文部科学省による「データ駆動による課題解決型人文学の創成」に対するヒアリングが実施され、「a」評価 (評価結果は「a」「b」「c」の3段階) を獲得

9月

文部科学省が「ロードマップ 2020」を公表し、「データ駆動による課題解決型人文学の創成」が掲載

令和 5 (2023) 年

5月

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」及び「データ駆動による課題解決型人文学の創成」について、文部科学省による「事業移行評価」(書面審査、現地調査、ヒアリング) が実施され、同 7 月、「速やかに後継計画へ移行することで、(中略) 予想を超えた成果が創出されることが期待できる。」との評価を受ける。



令和 6 (2024) 年 4 月
「データ駆動による課題解決型人文学の創成」プロジェクト開始

文部科学省の 大規模学術フロンティア 促進事業とは

● 異分野融合研究の充実

本プロジェクトは、文部科学省が推進する、最先端の技術や知識を結集して人類未到の研究課題に挑み世界の学術研究を先導する画期的な成果をあげる大型プロジェクトの一つです。

文部科学省の「学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会」において「大型プロジェクトの推進に関する基本構想—ロードマップ—」を策定。このロードマップに掲載されたプロジェクトから、大規模学術フロンティア促進事業が選定されてきました。

例えばこんなプロジェクトがあります。

- ・「大型低温重力波望遠鏡（KAGRA）計画」
（「ロードマップ 2010」掲載）
- ・「Bファクトリー加速器の高度化による新しい物理法則の探求」
（「ロードマップ 2010」掲載）
- ・「『大強度陽子加速器（J-PARC）』による物質・生命科学及び原子核素粒子物理学研究の推進」
（「ロードマップ 2012」掲載）
- ・「30m光学赤外線望遠鏡（TMT）計画の推進」
（「ロードマップ 2012」掲載）
- ・「新しいステージに向けた学術情報ネットワーク（SINET）整備」
（「ロードマップ 2014」掲載）
- ・「高輝度大型ハドロン衝突型加速器（HL-LHC）による素粒子実験」
（「ロードマップ 2017」掲載）
- ・「大型先端検出器による核子崩壊・ニュートリノ振動実験（ハイパーカミオカンデ計画の推進）」
（「ロードマップ 2017」掲載）
- ・「ヒューマンライコムプロジェクト」
（「ロードマップ 2020」掲載）

「高輝度大型ハドロン衝突型加速器（HL-LHC）による素粒子実験」



©2006-2024 CERN

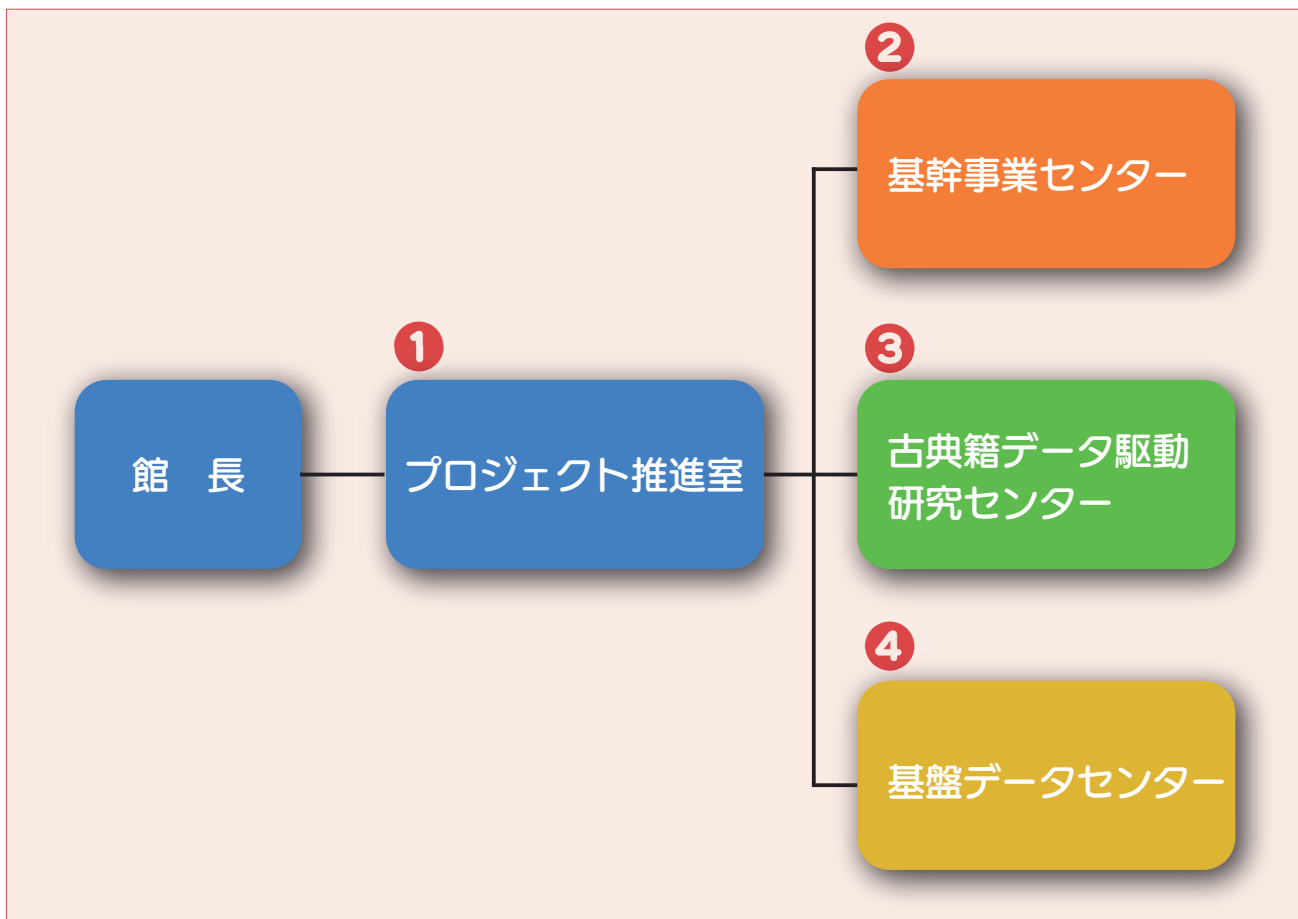
● 唯一の人文社会系プロジェクト

国文研では、唯一の人文社会系プロジェクトとして、平成 26（2014）～令和 5（2023）年度までの十か年で歴史的典籍NW事業を推進してきました。

令和 6（2024）年度からは、この後継プロジェクトである「データ駆動による課題解決型人文学の創成」が開始されることになったわけです。

これからの体制

国文研は以下の体制のもと、「データ駆動による課題解決型人文学の創成」プロジェクトを実施していきます。



①プロジェクト推進室

データ駆動による課題解決型人文学の創成プロジェクトを円滑に推進するため、当該プロジェクトの事業計画のとりまとめ、基幹事業センター、古典籍データ駆動研究センター及び基盤データセンター間の連絡調整、人間文化研究機構本部との連携等を行います。

②基幹事業センター

文献資料及び研究情報の調査、受入、整理、保存、公開等を行います。

③古典籍データ駆動研究センター

他分野と協働し得る課題解決型の人文学研究の創出を推進するとともに、データインフラストラクチャーの構築及び異分野融合研究を実施します。

④基盤データセンター

文献資料の画像データ収集及びデータベースのデータ拡充等を行うため、デジタル画像データ収集及び機械可読テキストデータ構築の進捗管理を行います。



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

電話:050-5533-2900

Web:<https://www.nijl.ac.jp/>

国文学研究資料館は、国内各地に所蔵される日本文学とその関連資料のデータを大規模に集積し、さまざまな分野の研究者の利用に供するとともに、それらに基づく先進的な共同研究を推進する総合研究機関です。

創設以来50年以上にわたって培ってきた日本の古典籍に関する研究の蓄積を活かし、国内外の研究機関・研究者と連携し、日本の書物を豊かな知的資源として活用する、分野を横断した研究の創出に取り組んでいます。

Contact

お問い合わせ

本プロジェクトに関するお問合せは
こちらまでメールでご連絡ください。

メール：htddpsinfo@nijl.ac.jp

担 当：プロジェクト総括係